ラテンアメリカ
随想

ジャガイモとスペイン語、そして頑固さ
ーラテンアメリカとスペインの絆

渡部 和男（ISAPH 理事、元在コロンビア大使）

ブラジルを除くラテンアメリカは3世紀あまりスペインの植民地であった。1492年のコロンブスによる新大陸到達、その後1521年のエルナン・コルテスによるアステカ王国征服、1533年のフランシスコ・ピサロによるインカ帝国征服などが続き、多くのスペイン人が新大陸に渡航した。そしてほぼ同時に、さまざまなものがラテンアメリカに持ち込まれ、逆に多くのものがラテンアメリカからスペイン経由で旧大陸に伝わった。

新大陸からはジャガイモ、トウモロコシやトマト、タバコが旧大陸に、スペインからはスペイン語とキリスト教、ワイン、馬などの家畜、そして感染症までが新大陸に伝えられた。これらの交流を基にラテンアメリカとスペインの絆、意識しないほどの深いつながりができ上がった。

本稿では、ジャガイモとスペイン語、そして政策決定において重要な「頑固さ」、という切り口からラテンアメリカとスペインの絆について考察してみたい(注)。

ジャガイモのきた道

ジャガイモ料理を好む人は多い。ペルー料理の中で、カウサ・レジェナ（Causa rellena）というジャガイモ料理があるが、その味は格別である。筆者はリマ中心部の古代遺跡が見えるレストランでこの料理を味わって感激した。これはペルー料理の前菜としてセビッチェ（魚のマリネ料理）とともに有名であり、causaという品種のジャガイモを使い、小エビやその他野菜などを入れて料理する。もともとジャガイモはアンデスが原産地であるが、現在、世界中で食されているジャガイモは約300種類存在すると聞かされた。

ペルー・マチュピチュの遺跡で、段々状になった畑の跡を見ながら、筆者は、マチュピチュ文明を支えたのはジャガイモであると直感した。インカの人たちは長い年月をかけて、毒を含んで食べられなかったジャガイモの品種改良と毒抜きに取り組んだ。野天にさらして凍結と解凍を繰り返した後に足で踏みつぶして水分を除去し、さらに水さらしと乾燥の過程を経て、チューニョ（chuñoあるいはpapas secas）を作る。この毒抜きされたジャガイモを開発するに至ったインカの人たちの長年の努力と知恵についてただ感嘆するばかりである。ラテンアメリカとスペインをつなぐ食物は多いが、これらの中でジャガイモは代表選手である。

スペイン・グラナダのアルハンブラ宮殿。1492年1月に陥落してレコンキスタ（国土再回復運動）が終結。その後、スペインの大航海時代が始まった（筆者撮影）

スペイン語のおかげでラテンアメリカとスペインがつながった

筆者の友人でありスペインのセビーリャ大学イタリア語学科正教授を務めたマヌエル・カレーラ氏がスペイン語とラテンアメリカについてどう感じているかを紹介する。彼は「スペインはラテンアメリカにスペイン語を持っていった。マドリードからチリまでの11時間の飛行時間、そして飛行

機を降りても、私の住んでいるセビーリャから外に出ていないかのように、人々とスペイン語で会話できることに私はいつも驚いている。同じ言葉を話すことで親近感を強く感じることができる。ラテンアメリカの子供たちはスペインの子供たちと同じ詩や文学作品を読んでいる。この言語・文化面での近さは音楽の世界でも当てはまる」と言う。筆者もガルシア・ロルカ、アントニオ・マチャードなどスペイン人詩人の有名な詩を覚えていたおかげで、国連代表部に勤務していた時、ラテンアメリカの人たちと仲良くすることができた。

当初、スペイン人たちは新大陸の人々との意思疎通に大変な苦労をした。1492年の第1回目の航海で新大陸に到達した時、コロンブスは先住民との間で身振り手振りにより何とかやり取りをした。

メキシコを征服したエルナン・コルテスも同じように苦労した。幸いコルテスは、ナワトル語・マヤ語そしてスペイン語にも堪能であった先住民女性マリンチェ（La Malinche）の助けを借りてアステカ王国を征服することができた。スペイン語が中南米地域に広く通用する言語となったのは、コロンブスの新大陸到達から約250年たった18世紀半ばになってからである。

スペイン語が中南米に広がった背景の一つは、先住民族が話していた言語の特殊性・非普遍性である。極めて限られた人口の部族の間で話されていた言語は、隣の部族の言語と共通性を持たず、通用する地域が限られていた。その意味で、スペイン人が持ち込んだスペイン語が徐々に共通語としての意味を持つようになった。もう一つの要素は、神の教えであるキリスト教の伝道である。スペイン人宣教師たちは、先住民貴族の子弟に対するスペイン語教育を通じて積極的に布教活動を行った。その結果として、キリスト教とともにスペイン語が中南米全域に広まった。今日のイスパノアメリカとしてのまとまりはスペイン語の果たした役割が大きい。イスパノアメリカ人が西洋文明とつながっているのはスペイン語とその背景となっている文化を通じてである。

頑固さ故に議論・紛争はこじれていく－カタルーニャ独立運動と三国同盟戦争に見る指導者たちの頑固さ

これは一部スペイン人も自ら認めていることのようであるが、スペイン人は、自己中心主義かつ傲慢、最後まで自己の正統性を主張し通す頑固さを持ち、自己顕示欲、妬みが強い。集団の中でもその主張を曲げずに正当性を主張し、最後まで頑張る人がスペインでは評価される。大体の落としどころを見て、早い段階で妥協策を出すスペイン人は評価されない。このような性格・気質はラテンアメリカ人に引き継がれた。この頑固さはスペインとラテンアメリカのインテリないしリーダーの共通した性格であり、二国間の紛争などでは悲劇的な結果につながることが多い。

1978年の新憲法に基づき開始されたスペイン民主化の大きな柱の一つは、バスク、カタルーニャなどの各州に地方自治を与えたことであった。その結果設立されたカタルーニャ政府は年ごとに実績を重ね、経済力の背景もあり強くなっていった。カタルーニャ議会では選挙区割りが独立派に有利なこともあり、独立派が多数を占めている。2017年10月、カタルーニャ議会は憲法に規定されていない住民投票を強硬に実施し、カタルーニャ独立推進派とスペイン中央政府との亀裂がさらに拡大した。カタルーニャ独立推進派、スペイン中央政府はともに頑固であり、今や国際政治学でいうチキンゲームのプレーヤーの様相を呈している。双方ともハンドルを切って衝突を避けようとしていない。

パラグアイの歴史を大きく変えた三国同盟戦争（1864～1870年）について考察する。当時のパラグアイ大統領フランシスコ・ソラーノ・ロペスは、隣国との同盟関係の形成に失敗した上、パラグアイの軍事的能力を過大評価して開戦したと言われている。1864年10月に始まった、ブラジル、アルゼ

エルナン・コルテスが描かれた1000ペセタ札（1992年発行、スペイン銀行提供）

フランシスコ・ソラーノ・ロペスが描かれた1000グアラニー札（1982年発行、パラグアイ中央銀行提供）

ンチン及びウルグアイの三国に対するパラグアイの戦いの経過については省略する。1868年3月のブラジル軍によるウマイタ要塞攻略、1869年1月のアスンシオン陥落により、戦局はパラグアイにとって圧倒的に不利になったが、それでもソラーノ・ロペスは降伏しなかった。アスンシオン陥落後も抵抗を続け、最後は1870年3月、ブラジル国境近くアマンバイ手前のセロ・コラーという場所でロペス大統領は戦死した。

首都アスンシオンからイグアスに向かう国道2号線の途中にアコスタニュ（Acosta Ñu）という場所がある。1869年8月16日、ここでパラグアイ兵4000名と、ブラジル兵を主力とする2万名の部隊が衝突し、パラグアイ側は3300名が戦死した。その大半は少年兵であった。パラグアイ国民はアコスタニュで犠牲になった子供たちのことを決して忘れず、毎年8月16日を「子供の日（Día del Niño）」として追悼している。強力なリーダーシップをとっていたソラーノ・ロペス大統領がアスンシオン陥落の時点でブラジルに降伏していれば犠牲者の数もかなり減っていたし、アコスタニュで多くの少年兵も命を落とさずにすんだ。敵国ブラジルに対して最後まで譲らなかったソラーノ・ロペス大統領の強い意志と頑固さでパラグアイ側の被害が拡大した。しかしながら、同大統領は、現代においてもその頑固さ故に祖国の英雄として称えられている。

指導者たちの頑固さはどの国・地域でも見られるが、スペインのフランシスコ・フランコ将軍やキューバのフィデル・カストロ国家評議会議長をはじめとした例のように、スペインとラテンアメリカにおける頑固さは極めて特異なものであると筆者は感じている。

（注）ポルトガルの旧植民地であったブラジル、あるいは英国、フランス、オランダなどの旧植民地であった一部のカリブ島嶼国はラテンアメリカ地域に属するが、本稿での議論の対象外としている。

参考文献

山本紀夫（2008）『ジャガイモのきた道 ―文明・飢饉・戦争』岩波新書
立石礼子（2009）「ラテンアメリカにおけるスペイン語の普及」、畑惠子・山﨑眞次編著『ラテンアメリカ世界のことばと文化』成文堂
渡部和男（2023）『スペインと中南米の絆 ―意識しないほどの深いつながり』彩流社

（わたなべ かずお　NPO法人ISAPH理事、元在コロンビア日本国大使）